ベン・バランさんのこと

西九州教会牧師　佐々木正明
２０１４年1月１９日


ベンさんと奥様と男の子　２００９年

１９８３年の秋、ベンさんは牧師と一緒に働いていました。彼自身はまだクリスチャンではありませんでしたが、海抜２千メートルほどの小さな集落で開いたばかりの私たちの教会に、奥さんが出席し始めていたのです。それで、貧しい牧師の住いの修理に、手を貸してくれていたわけです。ところが牧師と共にセメント工事をしようと、山道の脇で砂利を集めているとき、突然起きた崖崩れに巻き込まれて、彼だけが土砂に埋もれてしまったのです。

牧師の必死の奮闘によって掘り出された彼は、意識不明のまま、随分離れたところにある名前だけのクリニックに、運び込まれました。一人だけ駐在していた看護婦（？）にできたことは、ブドウ糖の点滴をすることだけでした。１週間後に目覚めた彼は、まったくの植物人間になっていたのです。彼の事故について聞いた私たちは、はあらゆる手を尽くして彼の回復を願いました。無駄と分かっていても、マニラに連れて行き、フィリピンで最高峰の病院、マカティ・メディカルセンターにも２ヶ月間入院させました。しかし担当医の通告は、「酸欠で脳が死んでいます。まったく望みがありません。あと数ヶ月の命です」という冷酷なものでした。

私たちはまた、残された家族のためにもできる限りのことをしました。自分たちの家を持っていなかった彼らが、一緒に住めるように小さな家も建てて上げました。開拓したすべての教会を励まし、力を合わせて支援の方法を考えました。奥さんが３人目の子を出産したのは、まだ、このような支援が具体的に始まる前のことでした。女の子、男の子に次ぐもう一人の男の子。２月２９日のことで、忘れることができません。

ところが数年たったある日、絶望的な夫を見ることが苦痛となった奥さんは、３人の子供を連れてほかの男へ走ってしまったのです。私たちは、まったく身動きもできないままひとり小さな家に残されたベンさんを、慰めるすべもありませんでした。ただ、彼を比較的大きな町に建てた教会に連れてきて、牧師と協力して教会の敷地に彼のための小さな家をもうひとつ建て、信徒たちに世話をさせるように手配したのが、精一杯でした。

それから３年ほどもたったでしょうか。ベンさんは少しずつ、本当にわずかながら話すことができるようになっていました。世話を頼んだ教会の大学生たちが、入れ代わり立ち代わりやってきて英語で話すために、カタコトながら英語でも話すようになっていました。彼の面倒をみるためにやってきていた姪っ子が、教会に出席してイエス様を信じるようにもなりました。そのうちにお母さんも救われました。みんなの手厚い助けをみて感動したのです。土着の宗教を押し付けて、教会を非難してやまなかった家族や親族の中からも、クリスチャンになる者が続出しました。（・・・ずっと後になってからですが、親族の中からは何人かの伝道者さえ起こって来ました）

彼の奥さんが亡くなったというニュースが届いたのは、そんなある日でした。一緒になった男と山に薪（たきぎ）を切りに行って、二人共、倒れた松の木に頭を打たれてしまったのです。訪れて、慰めの言葉もなく枕元にたたずんでいた私に、彼は英語ではっきりと言いました。「The Lord gave and the Lord hath taken away; blessed be the name of the Lord」「主が与え、主がとられたのだ。主のみ名はほむべきかな。」　いつの間にか、とてもしっかりとした信仰を持つようになっていたのです。母親を失った３人の子供たちがベンさんの許

に戻るようになり、彼の顔にも明るい笑いが戻ってきました。長女がかいがいしく世話をしていました。

そんな彼を残して、１９９１年、私たちはフィリピンを後にしました。次男の病気のためです。でも私は、その後もフィリピンを訪ね、彼にも会いに行きました。日本のクリスチャンにお願いして、子供たちの教育のために、支援のお願いもしたものです。いつの訪問のときだったでしょうか。私は２月２９日に生まれた彼の次男が、車にはねられて死んでしまったことを聞きました。言葉もなく寄り添った私に、ベンさんは言いました。「主が与え主が取られたのだ。主のみ名はほむべきかな。」

クリスチャンになる前に、教会の為にボランティアで働きにきて事故に遭い、すべてを失った彼の口から、わたしは一言の泣き言も恨みも不平も聞いたことがありません。本当に「一言も」です。そんな彼を、私たちの協力伝道者たち、そして私たちが建てた教会の信徒たちは、貧しい中からいろいろな助けの手を差し伸べていました。神様がなぜ彼をこのような目に遭わせられたのか、わかるような気がします。

「１年もたない」と医者に宣言された彼ですが、だんだん体力までも戻ってきました。始めは天井からぶら下げたブランコのような物に両手で捕まり、体を起こす練習に手をつけました。私が訪れると大きな声で話すようにもなりました。いつも興奮して、全身がまるでシャドウボクシングをしているような、激しい痙攣状態になり、押さえつけていなければなりませんでしたが、着実に回復していました。

残された二人の子供たちも、それぞれ立派に成長しました。それどころか、彼は車椅子に乗りはじめ、仕事さえ始めたのです。ごった返す人ごみの真ん中に割り込んで、それぞれの目的地に向かう乗合の車に、乗客を呼び込む仕事です。喧騒を掻き分けて車椅子を操り、人を呼び、車に案内し、運転手から何がしかの手間賃をもらうのです。わずかな収入ですが、これは彼の肉体と精神の健康の向上に、大きな力になったものと思います。でも聞いただけで、車にはねられはしないかと心配になったものです。

またこのころから、彼は市役所と交渉し、古くて汚れがひどいとはいえ、かなり広い建物を借りて、障害者の交流会を立て上げ、その会長として活躍を始めていました。障害者たちが沢山集まって、団欒したり、手作業をしたり、励ましになるように様々なことを考える共に、障害者の地位向上のためにも活動していました。町の職員が感心するほどの彼の姿に、驚くばかりでした。



現在のベンさんの家族と一緒に　２０１４年２月４日

次にフィリピンを訪れたとき、わたしはもっと驚かされました。彼が結婚したというのです。次の日にはさらに驚かされました。一歳になる子供がいると聞いたのです。相手は障害者の集まりに来ていた女性で、彼より３０歳ほども若いとのことです。１９９０年、バギオ市だけで１５００人以上の死者を出した地震で、片足を失った２０を超えたばかりの女性だと！！

わたしははやる気持ちを抑えながら、障害者のための建物に駆けつけ、ベンさんと若い奥さんに会うことができました。一歳の男の子を腕に抱き上げ、感謝と祝福の祈りもできました。ただでさえ貧しいフィリピンで、教育もなく、重度の身体

障害を抱えての生活は楽ではないはずです。でも彼らは、神様の恵みと兄弟姉妹の励ましを受けながら、いま力いっぱい生きています。

昨年の１２月（２０１３年)、「１月の末にそっちに行くよ」と牧師たちに連絡すると、ベンさんのニュースが入ってきました。「彼は今、２人の子持ちです。６歳の男の子と２歳の女の子です」「やりおったな！！」　お土産なんぞ、ついぞ持って行ったためしがない私ですが、今回は、持って行くことにしました。「６歳の男の子と２歳の女の子だな？」わたしは確認し直しました。「よし、この子達のために、古着を集めよう。ベンさんと奥さんのためにも持っていこう。ベンさんは、私より少し小柄で１６３ｃｍくらい。太ってはいない。奥さんは多分１５０ｃｍもない小柄な女性で、こちらも太ってはいないな・・・・」　写してきた彼らの写真を見ながら決めました。「子どもたちのためには、ちっちゃなおもちゃも持っていこうか・・・・」

２０１４年2月４日夕方　久しぶりにベンさんに会うことができました。ご家族も一緒です。フィリピン北部山岳地の伝道者セミナーに招かれ、大勢の懐かしい顔に囲まれて雑談をしていたときです。「ベンさんが来た！」という声にハッとして驚いて目をやると。車椅子に乗ったベンさんが、付き添いの人に押してもらいながら、いましも急な坂道を登ってくる姿が見おろせました。急斜面に建てられた教会は、正面玄関からは一階でも、駐車場のある下側から来ると３階ほどの高さにありました。松葉杖の奥さんが、意外に身軽に階段を上り始め、２人の子供たちがピョンピョンと跳ねながら続いていました。

登りきった奥さんと握手し、挨拶をしながらふと階段を見ると、何と！　ベンさんが、ひとりで階段を登っていたのです。手すりに掴まりながら、ゆっくりゆっくりとではありますが、一歩一歩確実に登っていました。付き添いの男性が、いつでも手を貸せるように横についていましたが、ベンさんはあくまでもひとりで登りきったのです。さすがの私も、涙がこぼれそうになりました。酸欠で脳が死に、野菜人間の状態にまでなって長年寝たきりだった兄弟が、ここまで回復したのです。足の筋肉も力を取り戻しつつあるのです。

嬉しい会話が続きました。可愛い子供たちを膝に抱き上げお話をしました。人懐っこい子たちでした。昨年の暮れ、彼らをお世話してきた牧師がくれた情報は間違っていて、上の男の子は５歳。下の女の子は３歳でしたが・・・・・持っていった古着もおもちゃも、役に立っただろうか。「男の子の古着はちょっと足りなかったかなぁ」　最初の奥さんとの間の長女は既に成人となり、結婚して子どももいるということです。さらに長男もバギオ市のボディ・ビルディングジムで指導員をしていると聞きました。

ベンさんと奥さんは、とても辛い体験をしました。「神さま。どうしてですか？！」と叫んだこともあることでしょう。でも、今は喜びと希望に満ちています。やがての甦りのとき、完全な肉体が与えられることを知っているからです。今はまだまだ痛み続けています。それは、痛み苦しんでいる多くの人々とともに生き、その痛みと苦しみを最も激しく体験した人として、心を通じ合わせながら、キリストの福音を語ることができるためなのです。ベンさんの生き様は多くの人たちを励まし、救いに導いています。昨年、３０年以上も筋ジストロフィーで苦しんだ末に天に召された兄弟がいました。彼もベンさんの人生に強く励まされた一人でした。自分の苦しみを、神の福音との関わりの中で受け入れることが出来る人は、その苦しみを「キリストのための苦しみ」とすることができるのです。(ピリピ１：２９)



ベンさんと私の会話の様子は、フェイスブックの吉原博克宣教師のページに写真と動画で載っています。